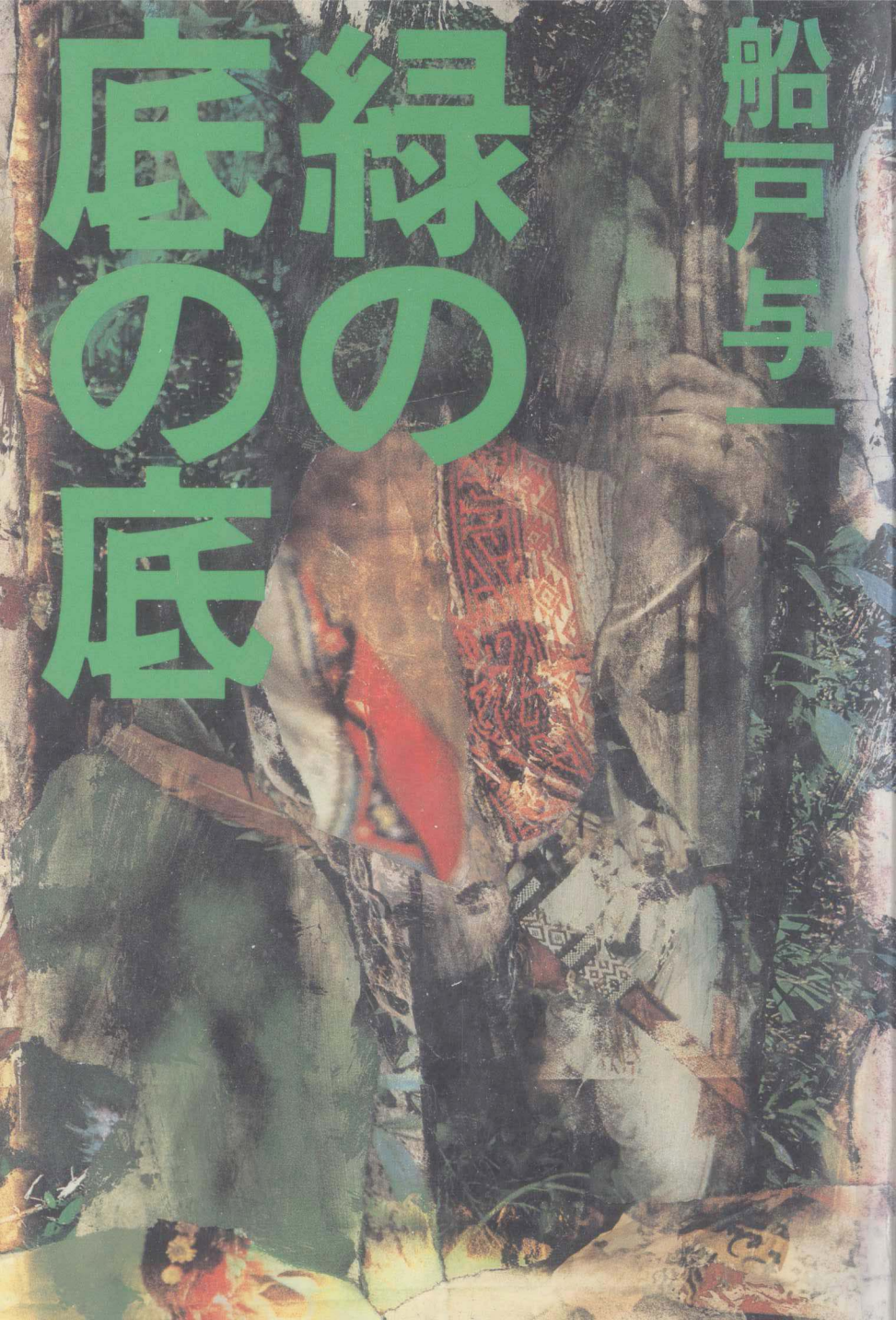


船戸与一

緑の底の底



緑の底の底

船声与

緑の底の底

一九八九年一〇月一〇日初版印刷

一九八九年一〇月二〇日初版発行

著者 船戸与一

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-八-七

振替 東京二-三四

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

published in Japan © 1989 CHUOKORON-SHA, INC.

Yoichi FUNADO

ISBN4-12-001868-7

目次

緑の底の底 | 5

メビウスの時の刻 | 225

装
幀
虎
尾
隆

緑の底の底

緑
の
底
の
底

唄ってよ、ねえパブロ、おかしなおかしなあ唄を。そうよ、そのギターを弾きながら。明日はあたしはお嫁に行くんだから。純白の絹の花嫁衣裳に包まれて。樹々に囲まれたあの人の白い館へ。ハプスブルグ家の貴族の血を引くすてきなすてきなあの腕のなかに。だから、お願い、ねえパブロ、唄ってちょうだい、妙にばかげたあの唄を。

《ギターを掻き鳴らしながら》

アイヤア、アッハア、

ミネーロ鳥の言うことによ、

緑の底の底の底。

そこは白い裸族の住むところ。

人喰いインディオの住むところ。

近づくやつは死ぬだけさ。

骨まで食われてそいつで終わり。

アッハア、アイヤア、

ミネーロ鳥の言うことにや、
緑の底の底の底。

そこは白い裸族の住むところ。
他のインディオも近づけない。

アイヤア、アッハア、

神を呪って暮してゐる、

それが白い白いインディオ。

それが白い白いインディオ。

六月六日午後二時三十七分

尾長蜂の羽音が近くでせわしなく聴こえている。
木洩れ陽さえが眩いが、ぼくは瞼を開けて腕時計
を見た。そう、死んだ母方の祖父が形見に残して
くれた古い古いスイス製ウォッチを。革バンドは
何度か取り替えたが、龍頭を巻き忘れないかぎり、
時刻はこれまで狂ったことがない。左手首を近づ
けてぼくはそれを見た。針はいま二時三十七分を
指している。首都カラカスからの定期便が到着す
るまであと一時間近くもあった。まだまだゆっく
りしてられる。ぼくはぼんやりとプールのほうに

眼をやった。水と戯れてる人間はだれもない。

ホテル・アマゾナスのプールには何枚もの黄色い
アラガネイの落葉が浮かんでるだけだ。当然だろ
う。いくらプエルトアヤクチョがベネズエラ政府
の直轄領アマゾナス特別州の州都だからと言って、
こんなところまでやってくる人間はめったにいや
しない。それに雨季も終わったばかりだ。まだ観
光シーズンにははいっていない。古ぼけたホテル
はむんむんする午後の陽光に照りつけられたまま
閑散としている。

ぼくはプール・サイドに吊したハンモックのう

えでまた瞼を閉じることにした。尾長蜂の羽音さえ気にしなければ、こうやってるのは実に気分がいい。シンクレアの面影がついつい脳裏に浮かぶ。亜麻色のゆったりと波打つ長い髪、いつも夢うつつのように焦点のはっきりしない瞳、笑うと左の頬だけにできるえくぼ、ああ、考えないことにしよう。きりがいい。きりがいいよ。ぼくは瞼を閉じたままハンモックのうえで二度ほど首をひねり、ゆっくりと腕組みをした。

しかし、それにしてもほんとうなんだろうか？ 叔父はこう言った。東京はもうだめだ、だれもが拝金病に罹^{かか}っている。人間が人間らしい営みのできるどころじゃない。コンピュータに制御される高度情報化社会は結局、人を窒息させる。叔父のエイジ・コサカが断言したその言葉が何度も何度も耳のなかで跳ねかえる。

もしそれがほんとうだとしても、ぼくは一度は東京に行ってみたい。拝金病に罹^{かか}ってる連中ばかりがたむろしてる場所だろうが、人間をだめにするところだろうが、かまうもんか。高度情報化社会とは実際にはどんなところなんだ？ とにかく、

ぼくは父や母方の祖父が生まれ育った日本の土を踏んでみたい。

このままカラカス大学を卒業して、いったんどこかの法律事務所勤める。それだつてとくに不満というわけじゃない。卒業後、二年ばかり経ってシンクレアと結婚することになるだろう。法律事務所で何年かの経験を積んだあと、ぼくは弁護士として独り立ちすることになる。そのころはシンクレアとのあいだにひとりかふたり、子供をもうけるだろうな。やがて、ぼくらはカラカスの中産階級の住むエルバライソ区かどこかに家をかまえる。小さなプールぐらいついているところを。

シンクレアの親は安心するだろう。ぼくの両親も充分に満足だろう。波風の立たない人生ってやつはたいいていそうやって過ぎていくんだ。それならそれでいい。ぼくはシンクレアに惚れきってるし、シンクレアもぼくと会ってるときが一番楽しいと言ってる。

だけど、それでも、何だかこころが騒いで胸苦しい気がするときがある。何かこう、全身がびりびりするようなことをしてみたいという気持ちも抑

えきれない。シンクレアには一言も喋ってないけど、ときどき無性に東京で暮してみたくなることがある。ベネズエラで生まれベネズエラで育ちベネズエラで死ぬことが、ぼんやりとだが、空しく思えることがある。

叔父の頼みを引き受けたのもたぶん、それが理由かも知れない。予想されるシンクレアとの平穩な暮し。未知の世界に飛びこんでみたいという欲求。叔父の依頼に頷いたのは無意識のうちにじぶんの人生に二股をかけていたのかも知れない。

ぼくはハンモックのうえで両腕を組み替えた。

そのとき、プール・サイドに面した客ひとりないレストランのなかからインディオのボーイがこっちに近づいてくるのが見えた。何族だかわからない。そんなことは叔父と一緒に動くようになれば厭でも知るようになるだろう。とにかく、そのボーイの歩みはのろかった。ぼくは思う。ベネズエラ人は働きたがらない。ことにインディオときたら、労働意欲のかけらもない。将来、カラカスで法律事務所を開くことになったら、どういふ人間を傭い入れるべきか、きっちり考えなきゃなら

ない。インディオのボーイがようやくハンモックまで近づいてきた。ぼくは一週間ほどこのホテル・アマゾナスに泊まっているが、このボーイの姿は二度しか見たことがない。年齢は三十過ぎだろう。ボーイは黙って封筒を差し出した。それを受け取って差出人の名まえを見た。シンクレアだ。ぼくは封を開いて、便箋にちまちまとした文字で書かれた文面を読みはじめた。

《愛するあたしのマサオ。どうしてる？ 元氣よね？ アマゾナス州は怖いところだと聞いてるけど平氣？ 毒蛇や毒蜘蛛がいっぱいいるんでしょ？ あたし、心配で心配で。でも、パパに訊いたら、男はみんな危険な目に会って成長していくものだと言うのよ。ひょっとしたら、マサオはカラカスに帰ってきたときはあたしが近寄りがたいほどたくましくなってるかも知れないわね。期待と不安が半々です。それから、カラカスに帰ってきたら、なるべく早くカトリックの洗礼を受けるようにしてね。パパとママのマサオにたいする希望はそれだけです。あたしのほうはふだんと何の変わりもありません。三日まえにマサオのご両親

とお会いたけど、こちらでも変わりなし。とにかく、体には気をつけてください。夜はいつもマサオの夢ばかり見るわ。百回分のキスをこめて。シンクレアより」

ぼくはにたつきながら手紙を読み終えて、それを封筒にしまいこんだ。インディオのボーイがまだハンモックのそばに突っ立っていることに気づいたのはそのときだ。じっとこっちを眺めてる。ぼくはどきまぎしながらすこし声を荒げて訊いた。

「な、何か用かい？」

「大学に行ってるんだらう、あんた？」

「そうだよ、それが？」

「教えて欲しいんだ」

「何を？」

「福音派ってどんなんだね？」

「キリスト教の一種だろう？」

「それはわかってるよ。けど、カトリックの教会

とどこがどうちがうんだね？」

「わかんないよ、ぼくには」

「大学に行ってるんだらう？」

「ぼくが学んでるのは法律だよ」

「何でも教えてくれるんじゃないのかね？」

「そんなことはないさ。大学は専門別に分れるんだよ。それに、ぼくは宗教なんかに興味はない。しかし、どうしてもそんなに福音派のことが知りた

いんだい？」

「勧められてるんだよ、はいれってね」

「厭なのかい？」

「べつに厭というわけじゃないけど、おやじもおふくろもカトリックだったし。けど、友だち連中がみんなはいりはじめたから、どうしたものかと思つて」

「福音派はそんなに増えてるのかい？」

「プエルトアヤクチョの近くじゃ、あっちこっちで福音派が新しい村をつくりはじめてるよ。酒も煙草も、音楽を楽しむのもだめなんだ。それなのにみんな一所懸命に村をつくってるよ。なぜかね？」

「わかんないよ、ぼくには」

インディオが眼に失望の色を浮かべた。まるで喋って損をしたとでも言いたげに。それから、挨拶もせずにはハンモックのそばを離れていった。

ぼくはむっとしたが何も言わなかった。インディオはしょうがないんだ。妙におどおどしてるかと思えば、いまみたいに腹立たしいほど厚かましい。もっとちゃんとした教育を受ければ、やがて礼儀も知るようになるだろう。肚のなかでそう決めつけながら、シンクレアから来た手紙をもう一度、封筒のなかから抜きだそうとした。

額にぼこんと何かが落ちてきたのはそのときだった。それはそのまま胸のうえを転がって、ハンモックの網目に留まった。マンゴーの実だった。

ハンモックを吊してる樹の枝から熟して落ちてきたらしい。ぼくはべつに腹が減ってたわけじゃない。だが、何だかずいぶん得をしたような気がして、指で皮を剥ぎ、その実を食べはじめた。

アマゾナス特別州の強烈な太陽に曝されていたせいだろう、マンゴーの果肉は茹であげたように温く、それにやけに甘かった。口のなかで妙にねたねたとする。ぼくはハンモックから降りて、プールに近づいた。シンクレアからの手紙をジーンズのうしろのポケットに振じこみ、プールに両手を突っこんだ。生ぬるいその水を掬って、それで

口のなかを漱いでからあらためて腕時計に視線を向けてみた。

時刻は三時を四分ほどまわっていた。

そろそろ叔父を迎えに行つたほうがいい。

ぼくは濡れた両手をジーンズの太股に擦すりつけてプール・サイドを離れた。客ひとりいないレストランを抜けて、ホテル・アマゾナスのエントランスを出た。

同日午後三時六分

植え込みのまわりで尾長蜂が戯れてる。

ぼくはホテル・アマゾナスの前庭に駐めてあるランドローバーの運転席に乗りこんでエンジンを開始した。プエルトアヤクチョはアマゾナス特別州の州都とは言え、ちっちゃなちっちゃな街だ。一週間もいれば、どこに何があり、道路はどこまでが舗装されているかはだれにでもわかる。ぼくはインディオたちの露店商が並ぶアヤクチョ通りの混雑を避けて、サンミゲル通りにランドローバーを進めていった。

それにしても、叔父の力はたいしたもんだと思う。このランドローバーはベネズエラ国境警備隊プエルトアヤクチョ駐屯地から借り受けたものだ。オリノコ河を挟んでコロンビアと国境を接しているこのあたりは重要なコカインの流通ルートのひとつだと言われている。国境警備隊が忙しくないわけがない。それなのに、叔父はカラカスからの電話一本ではなしをつけた。そして、ぼくが一週間まえにプエルトアヤクチョ空港に着いたときは出迎えの兵士がこのランドローバーを用意して待っていたというわけだ。叔父についての知識は父に聞いていることぐらいしかなかったが、こんなことがやれるなんてまったくすごい実力者だと考えてしまう。

プエルトアヤクチョ空港に着くと、カラカスからの定期便はまだ来てなかった。ぼくはランドローバーのなかで待った。冷房はついてないので、じっとしても汗がだらだら流れるが、空港待合室にはいっても同じことだ。そこは密林をトラクターで削り取った広大な大地にぼつりと建てられたブロック造りの小さな一階建てで、もちろん空

調設備なんかない。なかにはアルミ製のベンチがふたつ備えつけられ、あとは荷物の検査室になっている。定刻の三時半になっても、晴れ渡った空には機影すら見えなかった。いつものことだ。また大幅に遅れるだろう。ぼくはあくびをしながら運転席で脚を組み替えた。

国境警備隊のジープが二輛、空港待合室のそばに横づけられたのはそれからすぐだ。薄緑色の制服を着た四人がそこから飛び降りた。そのうちのひとりがこちに近づいてくる。兵士じゃない。肩に中尉の階級章をつけていた。年齢は二十五、六だろう。

純血のそのスペイン系がこちに向かってランドローバーから出ると仕草で命じた。ぼくは運転席から足を踏みだした。純血スペイン系のその中尉が声を荒げて言った。

「どういふことだ、これは？」

「何のことです？」

「どうして民間人が国境警備隊の車輛を使っている？」

「借りてるんです。書類もあります。お見せしま

しょうか？」

純血スペイン系の中尉はじろじろとこっちの顔を睨めまわした。それから、言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「すると、あんたはドクトル・コサカの？」

「甥のマサオ・コサカです。三時半の便で叔父がカラカスからやって来るんで、迎えに来てるんです」

「そいつは失礼をした。司令官から聞いてるよ。粗相のないようにとね」若い中尉は急に口調を柔らげた。「実はわたしたちもドクトル・コサカを迎えに来たんだよ。何と言うか、表敬のためにね」

「わざわざですか？」

「司令官の命令なんだよ」

ぼくは正直に言つて叔父がどうしてこれほどまで国境警備隊の厚遇を受けるのか見当もつかない。カラカスからの電話でランドローバーを借り受けたのは何らかのコネクションを利用したからだろう。レンタカー・システムのないプエルトアヤクチョで大型車輛を必要とすれば国境警備隊に頼む

しかない。それができただけでもふつうじゃ考えられないことだし、とにかく、ぼくが知らないところで叔父がベネズエラの軍関係者にたいした力を持つてゐる証拠だ。しかし、それにしても中尉に出迎えさせるなんて、いくら何でもいかにもおおげさ過ぎる。

「楽しみだよ、まったくね」

「何がです？」

「ドクトル・コサカに会えるのが」

「どうしてです？」

「司令官と昵懇らしいからね」

ぼくは黙つて肩を竦めてみせた。

国境警備隊プエルトアヤクチョ駐屯地の司令官とどういう具合にそういう関係になったのかわからない。叔父はほんのちよつぱりとしかスペイン語は喋れないし、第一、職業は文化人類学者だ。それも世界的に有名というわけじゃない。父のはなしじゃ、強引な性格が災いして叔父は東京の有名私立大学の教授職を追われたそうだ。いまはニューヨークのワシントン広場の近くにある大学で講師として教鞭を執っている。それがベネズエラ